スケールを覚えるコツを掴み完璧にマスターする講座
スリーノート・パー・ストリング編vol.11

さて、前回、『マイナー系の基本スケールである「エオリアンスケール」』と、『メジャー系の基本スケールである「アイオニアンスケール」』を、6弦トニックのポジションで見比べてみましたね。

ちなみに、名称としては、

アイオニアンスケール ＝ メジャースケール

エオリアンスケール ＝ ナチュラルマイナースケール

と、それぞれが同じ構造になります。

そして、

メジャー(アイオニアン)スケールは、メジャーキー(長調)の、

ナチュラルマイナー(エオリアン)スケールはマイナーキー(短調)の、

現代ポピュラーミュージックでメインに使われている、「調性(key)」の基準スケールになりますので、そちらとの関係性も把握しておきましょう。

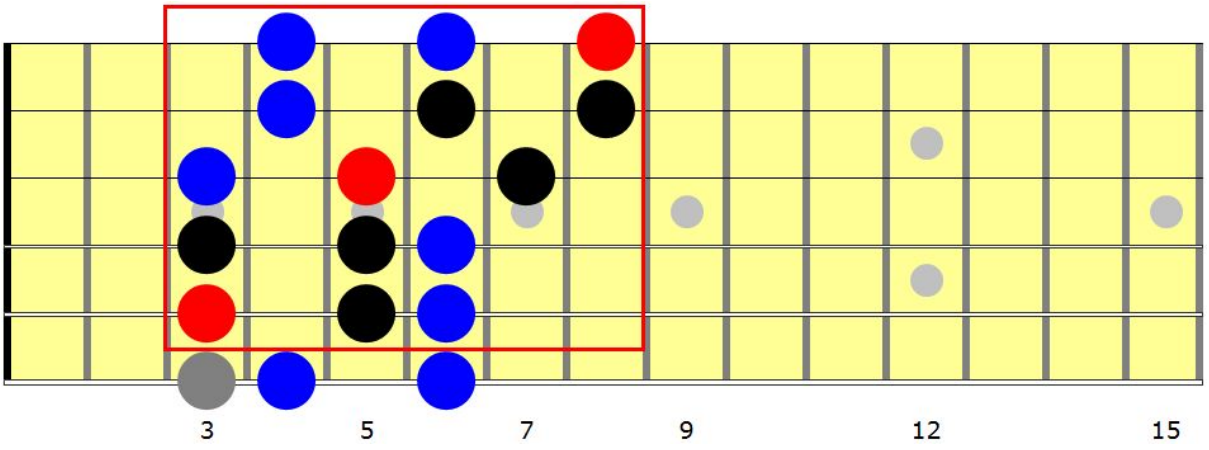
(※keyなどの詳しい解説は、別途配布している【ギターと音楽の教科書】などを参考にしてください)

という事で、今回は、エオリアンとアイオニアンの構造を、5弦トニックのポジションで確認してみましょう。

トニックは前回と同じくC音になります。(※各弦の指使いもこれまでのテキストと同じです)

図1、Cエオリアンスケール、3nps、5弦トニックポジション

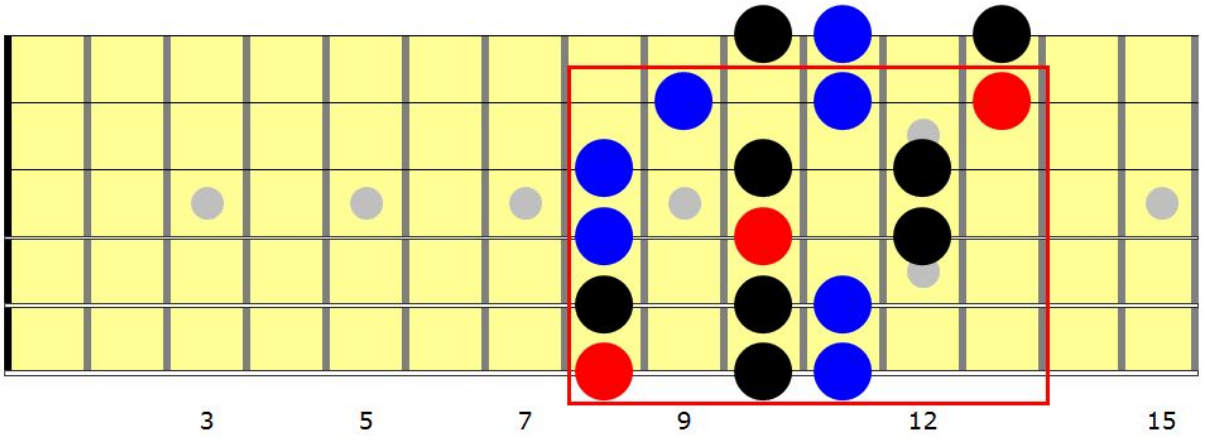
Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved



6弦側の音は、今の段階では弾く弾かないは自由です。

毎度おなじみの様に、ポジションが2～3弦間で1フレットずれていますが、前回弾いたこの範囲と、そもそもの形は同じですね。

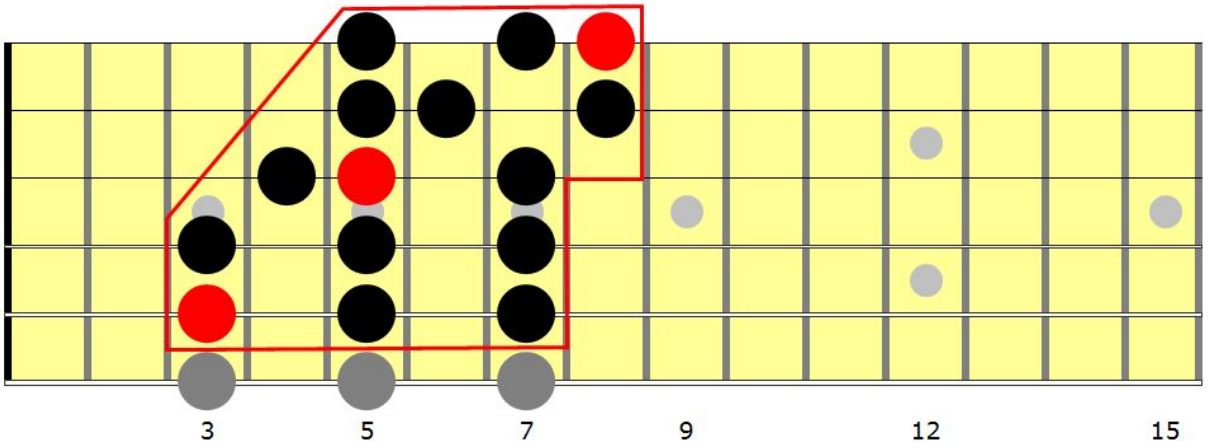
図２、前回のエオリアンスケール、6弦トニック図



続いて、5弦トニック時のCアイオニアンスケールも弾いておきましょう。

図3、Cアイオニアンスケール、3nps、5弦トニックポジション

Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved



前回のテキストにも載せましたが、両者のインターバルは、

・エオリアンスケール
tonic、M2nd、m3rd、P4th、P5th、m6th、m7th

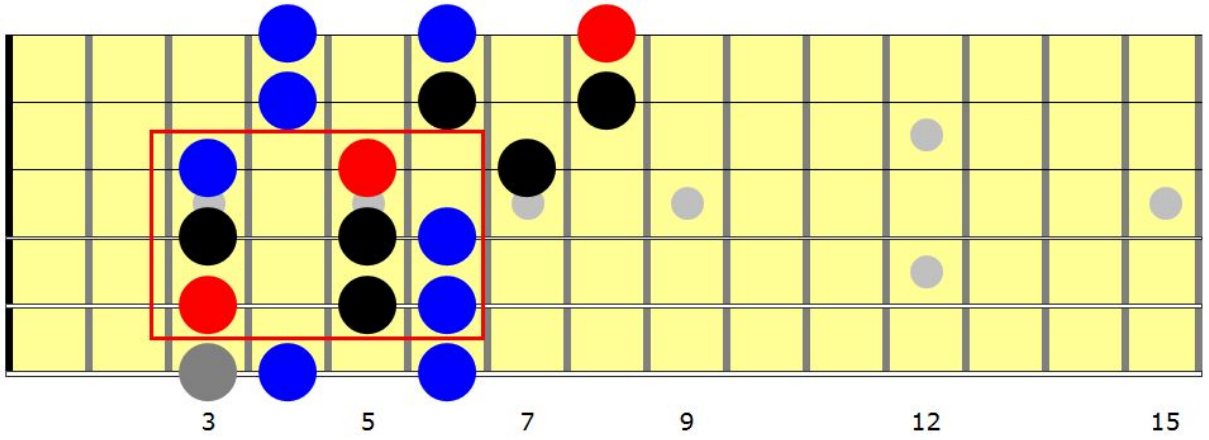
・アイオニアンスケール
tonic、M2nd、M3rd、P4th、P5th、M6th、M7th

となっていましたね。

今回のテキストでも、全て、その3種の音を青丸にしてありますので参考にしてください。

6弦トニックの時にも同じ範囲を囲いましたが、やはりまずはこの、1オクターブ内での構成音の配置を確実に把握していることが大事です。

図3、Cエオリアンスケール、3nps、1オクターブ間、5弦トニック



トニックとする音に人差し指を置き、その範囲で「ナチュラルマイナー(エオリアン)スケールを弾く」となったとき、上記赤枠内の音を問題なく弾けることが基本です。

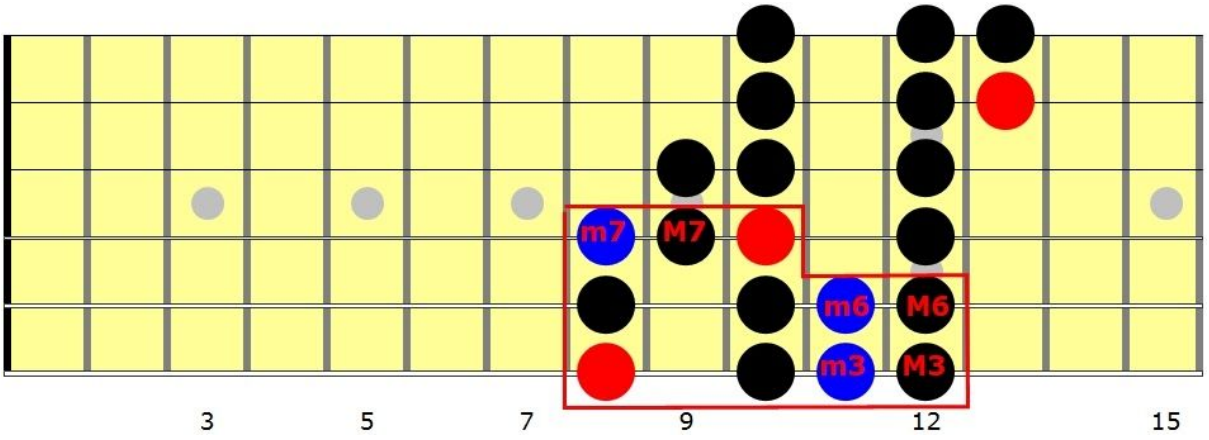
Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved

やはりメジャー系3種の時と同じように、エオリアンのこの構成を把握したうえで、他のマイナー系スケールとの差異を見ていくことになりますので。

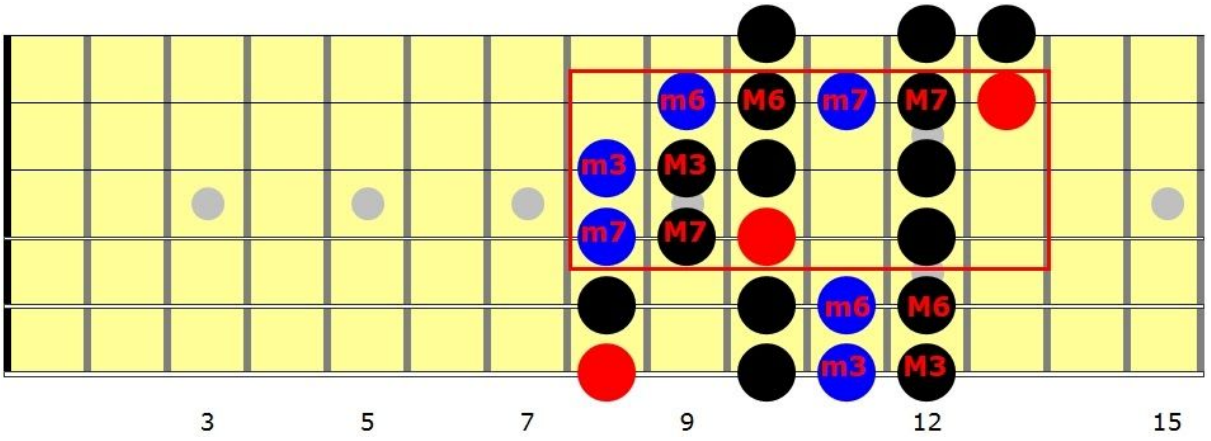
そしてまた、前回と同じように、ここまでの図を参考に、今度は5弦トニックの方でアイオニアンとエオリアンの構成音の違いを確かめておきましょう。

以下は、前回(6＆4弦トニック)のポジションを見た時の図ですが、基本的には同じ音の配置になっていますので、5弦トニック方に当てはめて、じっくりと確認してみてください。

※前回図、アイオニアンとエオリアンで出てくる音、1オクターブ間、6弦トニック



※前回図、アイオニアンとエオリアンで出てくる音、1オクターブ間、4弦トニック



こういった確認を繰り返し、音程感(聴覚)とフレット感覚(手、身体の感覚)が一致してくると、

『このスケールでこの音を弾くと、次の(もしくは周りの)音はこの辺にある』

と言うのが耳と身体で掴めるようになってきます。

Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved

そうして、構造に慣れてくれば慣れてくるほど、出だしの音さえ確認すれば、指板を見なくても目的の音(スケールポジション)が弾けるようになりますし、ミスが減っていきます。

ポジションそのものに慣れてきたら、アドリブ練習や作曲に使ってみたり、コピーしたプレイのアナライズなどにも活かしていきましょう。

「覚える事」と「使う事」、それぞれの時間配分を考え、練習量のバランスを上手く取って行けると習得が早くなりますので。

それでは、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) shunichi onuma All Rights Reserved